

探訪 北の風景 ⑬

道北の母なる川 天塩川

青木和弘

雨を予感させる、午後のしっとりとした空気に緑が息づいている。天塩川の流れはゆつたりと静かだった。音威子府村箴島の箴島大橋から上流の眺めである。

天塩川は道北の母なる川。北見山地の天塩岳(標高1558^{メートル})を水源に北に流れ天塩町で日本海に注ぐ。全長256^{キロメートル}、石狩川268^{キロメートル}に次ぐ日本で4番目に長い川である。道北にあつて流域人口が少なく、開発から取り残された感がある。だからコンクリートで固めた護岸が少なく、人を容易に寄せ付けない深い葎が茂り、幻の淡水魚イトウが生息するほど自然が残っている。名寄市から河口までの157^{キロメートル}にわたつて堰堤などの構

造物がないので、長距離の川下りを楽しむカヌー愛好家が全国から集う川でもある。

天塩川はアイヌ語の「テツシ・オ・ペツ(築・多い・川)」が語源だ。川に仕掛けて魚を捕る築のように、細長く岩が川を横断するような地形に由来するという。この「テツシ」は中流域の、美深町恩根内(おんねない)などの橋の上から見る事ができる。水量が多い日は隠れてしまうが、この日は、わずかに頭を出していた。ウグイスやカクコウなど多彩な野鳥のさえずりに包まれながら、堤防をしばらく歩いてみたが、川に下りられるような道も踏み跡も見つからなかった。赤や黄や紫の野草が、堤防の斜面いっぱい咲き乱れていた。

江戸幕府の命を受けた冒険家・松浦武四郎が1857年6月、天塩川の流域調査で川をさかのぼり、その帰路、音威子府村で、アイヌの長老の話を聞いて「北海道」の名を思いついたという。箴島大橋から1^{キロメートル}ほど下流の左岸に「北海道命名之地」碑がある。武四郎が眺めた天塩川もこのような姿だったのだろうか。

天塩川は四季折々美しい。一面の緑に包まれた夏は短い。秋には木々が黄色く色づき、空は夕焼けに染まる。長い冬は川面が結氷して白一色になる。冷え込んだ朝、川を囲む樹氷が朝日に輝くことだろう。春になると川面が解氷し、砕けた板氷が流れ下る。雪が消えると待ちに待った季節だ。新緑が一斉に川岸を覆い尽くすと初夏の訪れであ



天塩町北川口からオトヌルイ風力発電所を望む

る。

さらに北上して中川町を過ぎると、川は蛇行し、あちこちに三日月湖を残す。幌延町で西に大きく流れを変え、国道232号の北川口付近から、天塩川の向こうにオトヌルイ風力発電所の風車を望む。流れは砂州に導かれて南に向かい、8^{キロメートル}ほどで河口に至る。

南北に延びた砂丘には川口遺跡がある。紀元前3世紀の弥生時代から鎌倉時代後期の縦穴式住居跡だ。狩猟採集の民で、北方民との交易もしながら、海と川の恵みで暮らしていたらしい。

天塩町の和人の歴史も古い。江戸時代初期には地元アイヌとの交易場所を開設し、松前藩の役人





音威子府村箴島大橋から緑に包まれた天塩川の上流を望む



天塩川に近い牧草地で草をはむ放牧された牛たち=幌延町

が常駐している。
 明治以降は道北開拓の拠点だった、鉄道の整備される昭和10年ごろまでは、天塩川を中川町まで、食料や生活物資、農産物などを運ぶ長門船が往来し、木材の搬送にも川が利用されたが、いつころなくなったのかはよく分からないそうだ。
 江戸時代から知られた「天塩のシジミ」が、ピンチだという。パンケ沼とペンケ沼で捕獲量が激減し、サイズも小さくなったという。漁協では禁漁や、漁獲制限で資源の回復を目指しているが、海水と淡水の絶妙なバランスが、周辺の牧草地化や河川の直線化の影響で変化したのではないかという。現代人の活動と自然の営みが微妙に齟齬をきたしてきたのが心配である。